

## 日本におけるドナルド・キーン略年譜 1978—2014 〈2〉

北 嶋 藤 郷

### 西暦（和暦）年齢・事跡

1978年（昭和53） 56歳

これまでの『日本文学史』などの業績すべてに対する評価として、ケンブリッジ大学文学博士号（Doctor of Letters）を授与される。かつて住んでいたコレッジの守衛長の挨拶の言葉「おかえりなさい、先生」（“Welcome home, sir.”）に一番感動した。

6月～11月、東北大学文学部特別招聘教授として着任。

バーバラ C.足立『文楽の人びと』（講談社インターナショナル）の「序」を書く。

『日本文学を読む』（雑誌『波』に6年間連載したもの）新潮選書として出版<sup>(1)</sup>。

1979年（昭和54） 57歳

『日本を理解するまで』を新潮社より出版。（新宿・紀伊国屋ホールの新潮社の文化講演会）6回にわたる連続講演を基に加筆・改稿したもの。

『日本文学の中へ』（研究自叙伝シリーズ）を文藝春秋社より出版。

『日本の魅力 対談集』中央公論社より出版。（対談者：佐伯彰一、永井道雄、三島由紀夫、安部公房、大岡昇平、井上ひさし、福田恒存、丸谷才一、辻邦生、円地文子など19篇）

井澤元一画文集『古都点描』の序文「伝統に迫る井沢さんの情熱」。

1980年（昭和55） 58歳

1月、紀行文『日本細見』（*Travels in Japan*）中矢一義訳で、中央公論社から出版のち中公文庫 1983。日航の社内雑誌『おおぞら』に掲載されたものを含む。[英文版] 学生社 1979。

6月、『音楽の出会いとよろこび 続音盤風刺花伝』中矢一義訳で、音楽の友社より出版。（クラシック音楽への深い造詣と音楽を聴くことの歓びを伝えるエッセイ集）のちに改題『音楽の出会いとよろこび』中公文庫 1992。

12月、中国・北京訪問。

1981年（昭和56） 59歳

欧州へ講演旅行。英国、フィンランド、ソ連、ポーランド、デンマーク

各国を歴訪。

『私の日本文学逍遥』を新潮社より出版。

音楽論『ついでさきの歌声は』中矢一義訳で、中央公論社より出版。（本書の目的は、オペラを敬遠する人々に、人間の声の独特の愉しみ方を伝えることであった）

ドナルド・キーン/藤井章雄共編『米英俗語辞典』(*American and British Slang Dictionary*)が朝日出版社より発刊。

1982年(昭和57)

60歳

8月、朝日新聞社の後援で、「緑樹」をテーマにした講演会が開かれた。某料亭での宴席で、司馬遼太郎が朝日の編集局長に向かって、「明治時代、朝日は駄目だった。しかし夏目漱石を雇うことで良い新聞になった。今、朝日をよい新聞にする唯一の方法は、ドナルド・キーンを雇うことだ」と言った。一週間後、客員編集委員のポストを与えられた。『日本人の質問』(1982.11.9~12.3)と題された、朝日新聞連載は好評。この成功のおかげで、朝日で働いた10年間で、3つの長期連載を書くことになる。最初の連載『<sup>はくたい</sup>百代の<sup>くわかく</sup>過客』(金関寿夫訳)は、上巻には「朝日新聞」(1983.7.4~1984.4.13まで全185回)、下巻には同紙(1986.10.13~1987.10.29まで全234回)に連載されたものを収録。平安初期から幕末まで(9~19世紀)にかけて、日本人が書いた日記80篇を読み解き語った。この日記文学の研究は、ノンフィクションの最高傑作として、1985年に読売文学賞と日本文学大賞の二つの賞を受ける。その続篇は『続百代の過客』で、「朝日新聞」に連載された。正篇が終結した時点から始まり、日記を通して日本人を見るという正篇同様の観点から書かれ、研究の対象となる日記は、1920年まで延長された。最後の「朝日新聞」の連載は、作家たちとの交遊録であった。『声の残り』(1992.4.1~7.11)は、連載時から評判がよかった。

朝日新聞社客員編集委員。

ドナルド・キーン/羽鳥博愛監修『会話作文 英語表現辞典』(*Japanese-English SENTENCE EQUIVALENTS*)が朝日出版社より出版される。

1983年(昭和58)

61歳

6月、自伝『日本人の質問』(朝日新聞社)を出版。

7月4日から「朝日新聞」(夕刊)に「百代の過客 日記にみる日本人」<sup>(2)</sup>の連載開始。

第1回 山片蟠桃賞を受賞。大阪府が設立したもので、司馬遼太郎の推薦による。その賞金で、「敦煌・トルファン美術の旅」(9月4日~19日)に

参加。国際交流基金賞受賞。

1984年（昭和59）

62歳

『百代の過客 日記に見る日本人』(*Travelers of a Hundred Ages: The Japanese as Revealed Through 1,000 Years of Diary*) 上下巻、金関寿夫訳で、朝日新聞社より出版。のち愛蔵版全1巻 朝日新聞社 講談社学術文庫2011。[原著] NY: Henry Holt & Com.1989.

『日本文学史 近代・現代篇』(*Dawn to the West: Japanese Literature in the Modern Era*) 全8巻 徳岡孝夫・角地幸男・新井潤美共訳で、中央公論社(1984-92)より出版。[英文版] New York: Holt, Rinehart & Winston, 1984.1327p.

5月1日、キーンの推薦により、コロンビア大学の Translation Centerから、野崎孝が「ソーントン・ワイルダー賞」(Thornton N. Wilder Prize) を授与された。M. トウエイン、ヘミングウェイ、スタインベック、フィッツジェラルド、サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』を経て、バースに及ぶ、長年にわたるアメリカ小説の名訳(本邦初訳)が高く評価された。7月24日、「53年ぶりのウィーン」『朝日新聞』記事。

1985年（昭和60）

63歳

先年刊行の『百代の過客』により、第17回 日本文学大賞を受賞。第36回 読売文学賞を受賞。コロンビア大学大学院教授会賞受賞。

『古今の英雄たち』(*Heroes, Old and New*) 翻訳は後に中矢一義訳で朝日出版より出版。

1986年（昭和61）

64歳

コロンビア大学に「ドナルド・キーン日本文化センター」を設立。

アメリカン・アカデミー会員(文学部門)に選出される。

『少し耳の痛くなる話』塩谷紘訳で、新潮社より出版。(初出は、月刊『リーダーズダイジェスト』連載の「ドナルド・キーンの日本文学診断」(1983.4~1985.3までの24回分))

10月13日より「朝日新聞」(夕刊)に「続百代の過客 日記にみる日本人」の連載開始。

1987年（昭和62）

65歳

『二つの母国に生きて』を朝日新聞社より出版。

『私の好きなレコード』を中矢一義訳で中公文庫より出版。

英文講演「日本人とコスモポリタニズム 日本から世界へ」(1. Cosmopolitans: The Japanese Way 2. From *The Tale of Genji* to Contemporary Literature) サイマル出版会。

東京都文化賞受賞。京都・国際日本文化研究センター発足、客員教授となる。

1988年（昭和63）

66歳

*The Pleasures of Japanese Literature*（『文学の愉しみ』）をコロンビア大学出版より出版。大庭みな子訳で、JICC出版局より出版 1992。のち瀬戸内寂聴の解説付きで、宝島社文庫2000。

コロンビア大学の最高称号であるユニヴァーシティ・プロフェッサーに任命される。

『続 百代の過客 日記にみる日本人 近代篇』上下巻 金関寿夫訳で、朝日選書として出版。のち函入愛蔵版全1巻 朝日新聞社 1988、のち講談社学術文庫2012。[英文版] *Modern Japanese Diaries: The Japanese at Home and Abroad as Revealed Through Their Diaries*, New York: Henry Holt and Company, 1995.

『宮田雅之切り絵画集 おくのほそ道』解説担当 中央公論社より出版。英訳版『おくのほそ道』講談社学術文庫 2007。芭蕉の原文併収。

8月1日、国際演劇協会歌舞伎ワークショップで、「歌舞伎における改作の功罪」を講演。

10月8日、福井県武生市文化センターで「私と紫式部」を講演。

11月5日、埼玉県草加市の奥の細道国際シンポジウムで「『奥の細道』の世界」を講演。

11月24日、京都・国際日本文化研究センターで「平安時代後期物語の新しさ」を講演。

1989年（昭和64）

67歳

講演「私と源氏物語」（新潮カセット）「源氏物語との出会い」「源氏物語における美」「アツツ島で読んだ紫式部日記」「角田柳作先生のこと」「京都留学のころ」など。

10月8日、群馬県高崎市の高崎薪能で「能の楽しみ」を講演。

1990年（平成2）

68歳

1か月をパリで過ごし、コレージュ・ド・フランスで日本人の日記について講義。

『日本人の美意識』を金関寿夫訳で、中央公論社より出版。のち中公文庫1999。

『古典を楽しむ 私の日本文学』朝日選書として出版。「谷崎潤一郎賞」選考委員に就任。

英国、セント・アンドルース大学より名誉博士号を授与される。

10月27日、栃木県・羽黒にて講演「おくの細道と日本文化」（芭蕉文学国

際シンポジウム)

12月、辻井喬との対談「伝説から実像へ」没後20年三島由紀夫特集『新潮』pp.100-15.

全米文芸評論家賞受賞。日本学士院客員となる。エドウィン・ライシャワー死去。

*Nō and Bunraku*, New York: Columbia University Press.

1991年(平成3)

69歳

10月24日、敬和学園大学開学記念講演「日本文学はなぜ面白いか」<sup>(3)</sup>(新発田市民文化会館)。

9月、中国・杭州大学で「日本文学」について連続講義。

11月、対訳 司馬遼太郎『21世紀に生きる君たちへ』の監訳/R.ミンツァー訳。朝日出版社。

「『芝居日記』の底に流れるもの」(『芝居日記』三島由紀夫) 中央公論社 pp.206-10.

全米文芸評論家(NBCC)賞受賞。第2回福岡アジア文化賞(芸術・文化賞)受賞。

1992年(平成4)

70歳

56年間も日本文学を教え続けたコロンビア大学を退職。同大学名誉教授となるも、毎年半年間の講義は継続。(コロンビア大学は、創立1754年、ノーベル賞受賞者97人を輩出した米国の超名門大学)

アメリカ・アカデミー会員。客員編集委員であった朝日新聞社を退職。

4~6月、NHK人間大学(教育テレビ)で「日本の面影」と題し13回にわたり放送。

12月、『声の残り 私の文壇交遊録』が金関寿夫訳で、朝日新聞社より出版。(今も鮮やかに耳に残る声:谷崎、川端、永井、三島、司馬、安部、開高、有吉などの日本作家たち)。のちドナルド・キーンの文庫版あとがき付で、朝日文芸文庫 1997。

『音楽の出会いとよろこび』を中矢一義訳で中公文庫で出版。

『世界のなかの日本 十六世紀まで遡って見る』司馬遼太郎と対談。中央公論社。のち中公文庫1996。

「二つの母国」、成田山学園成田山幼稚園創立40周年記念講演の冊子本。

1993年(平成5)

71歳

1月23日、「作品で世界と『会話』—安部公房氏を悼む」『朝日新聞』(夕刊)。

『このひとすじにつながりて』金関寿夫訳で、朝日新聞社より出版。初出

「朝日イブニング・ニュース」(“Invitation to Japan”) 1990.1.7～92.2.9に掲載。

『日本語の美』を中央公論社より出版。のち中公文庫 2000。日本語で書いたエッセイ集。

「私にとって日本語は外国語ではない」と〈あとがき〉に述べている。  
安部公房『未必の故意』『緑色のストッキング』『幽霊はここにいる』(Three Plays by Kōbō Abe)を翻訳。[英文版] New York: Columbia University Press.  
*Seeds in the Heart : Japanese Literature from Earliest Times to the Late Sixteenth Century*. New York: Henry Holt and Company. xiv, 1265p.  
勲二等旭日重光章を受章。日本放送文化賞受賞。

1994年(平成6)

72歳

『日本文学の歴史』全18巻を、1994-97(平成6～10)年にかけて、中央公論社から出版。

「日本文学の歴史」古代・中世篇は、*Seeds in the Heart : Japanese Literature from Earliest Times to the Late Sixteenth Century* (1993)。近世篇は、*World Within Walls : Japanese Literature of the Pre-Modern Era, 1600-1867* (1976)を訳出したもので、『日本文学史』上・下(中央公論 1976/77)の改訂新版。そして、「日本文学の歴史」の近代・現代篇は、*Dawn to the West, Japanese Literature of the Modern Era*, Holt Rinehart and Winston (1984)を訳出したものである。

『日本文学の歴史』古代・中世篇1～6巻 土屋政雄訳。近世篇7～9巻と近代・現代篇10～13巻 徳岡孝夫訳。14巻 角地幸夫訳、15巻 徳岡孝夫/角地幸夫訳、16～18巻 新井潤美訳。(日本文学の研究に生涯を捧げた著者が深い愛情を込めて、記紀万葉から三島由紀夫までを単独執筆した魅力溢れる通史。ソフトカバー装丁)

英文自伝 *On Familiar Terms : To Japan and Back, A Lifetime Across Cultures* 講談社インターナショナル (New York: Kodansha International)より出版。

6月26日、「西洋から見た近松の世界」長門市中央公民館。

10月、「恩師 角田柳作先生」を執筆。『早稲田学報』1994年10月号、pp.2-5。

10月、井上靖文化賞受賞。大江健三郎がノーベル文学賞受賞。

1995年(平成7)

73歳

*Modern Japanese Diaries—The Japanese at home and abroad as revealed through their Diaries—* New York: Henry Holt and Company.

井上靖文化賞受賞。また、ミドルベリー大学より名誉博士号を授与される。

1996年(平成8)

74歳

2月12日、親友・司馬遼太郎死去。

2月17日、「司馬文学を語る」(司馬遼太郎追悼インタビュー)『新潟日報』。  
4月、「御堂筋を歩いた思い出—司馬遼太郎氏を悼む」『中央公論』4月号。  
9月21日、大阪青山短期大学にて「近世の演劇」について講演。(「研究紀要」23号掲載)

10月、対訳『おくのほそ道』(*The Narrow Road to Oku*) 原作 松尾芭蕉、[切り絵] 宮田雅之。講談社インターナショナルより出版。

11月1日、新潟県立佐渡高校100周年の記念講演で、「日本文学と能」を講ずる。求めに応じて自詠句、「罪なくも 流されたしや 佐渡の月」を揮毫。相川町の陶芸家も訪問。これは4度目の佐渡旅行。

*The Blue-Eyed Tarōkaja : A Donald Keene Anthology* NY: Columbia University Press. 本書には、「佐渡紀行」(Sado, pp.165-71)が含まれている。

12月7日、長岡歴史シンポジウムで、基調講演「司馬史観とその文学」(長岡市・長岡リリックホール)

東京都北区アンバサダー就任。

1997年(平成9)

75歳

6月、「友人であり恩人一嶋中鵬二氏を悼む」『中央公論』6月号。

「日本の演劇」公開講座特別公演 大阪青山短期大学 研究紀要(第23号) pp. 1-13.

『日本文学の歴史』全18巻完結する。これにより朝日賞(人文科学)を受賞。

「私が見た川端康成と川端文学」伊吹和子との対談『川端康成 瞳の伝説』PHP研究所。

東北大学より名誉博士号を授与される。

12月5日、「ニューヨークの近松門左衛門」『東京新聞』記事。

1998年(平成10)

76歳

日本のクルーズ豪華客船「飛鳥」の世界一周旅行の一部に当たる2週間の巡航に招待される。唯一の義務は、船上で2~3回、日本文学の講演をすることであった。この時以来、毎年2週間を「飛鳥」の船上で過ごす。船旅のメリットは、電話に悩まされることなく研究に専念できた。船室で『明治天皇紀』の3~4巻読むことができたし、もっと後の航海では、足利義政に関する本を数冊読むことが出来た。

3月、英訳『竹取物語』(*The Tale of the Bamboo Cutter*) [現代語訳] 川端康成 [切り絵] 宮田雅之の豪華版。講談社インターナショナルより出版。

5月、『三島由紀夫未発表書簡 ドナルド・キーン氏宛の97通』中央公論社から出版。

5月、『日本文学における日誌の地位』(同志社大学第17回新島襄講座) 出版。

6月15日付で、新潟県長岡市・国際親善名誉市民となる。記念講演「世界の中の日本文化」(長岡・リリックホール)。また、小林虎三郎をモデルにした、山本有三の戯曲『米百俵』(*One Hundred Sacks of Rice*)を翻訳して、東京：研究社より出版。

11月、早稲田大学総合学術センター国際会議場で「近松と私」を講演。早稲田大学より、名誉文学博士号を授与される。記念講演は、「世界の中の日本演劇」。

大阪青山短期大学に「ドナルド・キーン日米学生日本文学奨励賞」設立。

*Modern Japanese Diaries The Japanese at Home and Abroad as Revealed Through Their Diaries* New York: Columbia University Press.

1999年(平成11)

77歳

日本文学研究の学生のための奨学金機構「ドナルド・キーン財団」設立。

「郡司正勝先生の思い出」『演劇學』(郡司先生追悼号)早稲田大学演劇学会 pp.80-81.

7月、谷崎潤一郎の墓は、京都の法然院にあるが、33回忌の法要が東京の某ホテルで催された。外国人の参加者は、他にE.G.サイデンステッカーのみであった。

10月、インタビュー「東外大独立百周年によせて」「東外大ニュース No.102」 pp.12-20.

徳島県・穴喰町立図書館の開館に合わせて、2000冊の本を寄贈。ドナルド・キーン文庫。

東京外国語大学初の名誉博士号を授与される。

2000年(平成12)

78歳

5月、「良い友達を失ってしまった一永井道雄氏を悼む」『中央公論』5月号。

10月28日、敬和学園大学創立十周年記念講演「日付変更線を越えるように、文学と歴史の境界線を越える私」<sup>(4)</sup>。同大学より名誉文化博士号を授与される。(この記念講演は、著書『私の大事な場所』(2005)に、「文学と歴史を越えて」として収録。pp.108-25)

11月「わが街、東京」(一東京よ、一歌舞伎座前、一砂土原町、一払方町、一馬込、西片町、一古河庭園、一再び、東京よ)『東京新聞』(11月17日、20~24日、27~30日夕刊)

慶應義塾大学より、名誉博士号を授与される。

2001年(平成13)

79歳

人間天皇の生身の姿に迫った画期的評伝『明治天皇』(*Emperor of Japan: Meiji And His World, 1852-1912*) 上下巻 角地幸夫訳で、新潮社より出版。

のち新潮文庫（全4冊）2007。[英文版]は、New York: Columbia University Pressから、2002年に出版。盟友永井道雄に捧げた、922頁に及ぶ大作。この作品で、毎日出版文化賞を受賞。

増補版『能・歌舞伎・文楽』が松宮史郎補訳で、講談社学術文庫より出版。

2002年（平成14） 80歳

『果てしなく美しい日本』講談社学術文庫より出版。

文化功労者に選出される。

2003年（平成15） 81歳

1月、「学者の苦勞」、『新潮』1月号。

『足利義政 日本美の発見』角地幸夫訳で、中央公論新社より出版。のち中公文庫2008。

[英文版]*Yoshimasa and The Silver Pavilion—The Creation of The Soul of Japan*—: New York: Columbia University Press, 2003.

『日本文学は世界のかげ橋』たちばな出版より上梓。（1991年9月、中国・杭州大学での「日本文学」講義に基づいたもの）

『明治天皇を語る』新潮新書として出版。講演の内容をもとに加筆、編集を加えたもの。

12月1日、「黒田杏子さんの達人対談 昨日 今日 明日」（京都・大徳寺真珠庵にて）『家庭画報』（1月号）

2004年（平成16） 82歳

2月『同時代を生きて 忘れえぬ人びと』瀬戸内寂聴、鶴見俊輔と鼎談。岩波書店より出版。

4月15日、NHKインタビュー出演「ハイビジョン特集 代々木の杜の物語～明治神宮」。（10年後の2014.4.30と同年5.8に、好評により再放送された）

7月17日、俳人・黒田杏子との対談「芭蕉と茂吉—文人誘う自然と風土」（山形文化フォーラム 第2回）大石田歴史資料館。

7月、「世阿弥の築いた世界」三島由紀夫・小西甚一と座談 決定版『三島由紀夫全集』40 新潮社、pp.653-70。〈初出〉日本の思想8 世阿弥集 月報・筑摩書房・昭和45年7月。

2005年（平成17） 83歳

2月、『私の大事な場所』（自伝的エッセイ集）を中央公論社より出版。のち中公文庫2010。

『思い出の作家たち—谷崎・川端・三島・安部・司馬』松宮史朗訳で新潮社より出版。（富岡幸一郎の書評「巨星たちの姿鮮やかに」は秀逸。『新潟日報』2006.1.26.）

[英文版] *Five Modern Japanese Novelists*, New York: Columbia University Press, 2003.

「《イル・トロヴァトーレ》ほど楽しいオペラはない！」(3月5日公演 彩の国ヴェルディ・プロジェクト《イル・トロヴァトーレ》プログラムに所載。8月15日、「自分たちと同じ『人間』がいた……」『讀賣新聞』(戦後60年「戦場の手記」として、8月10日より、1～6として6回にわたって掲載された。キーンの記事は6に)

2006年(平成18)

84歳

5月1日、本の森逍遥：黒田杏子「ドナルド・キーン先生と日本を眺め直す」雑誌『明日の友』隔月刊4-5月2006春、pp.108-09。(黒田杏子『俳句の玉手箱』pp.110-13にも所収)

7月、ドナルド・キーン編『昨日の戦地から—米軍日本語将校が見た終戦直後のアジア』中央公論新社より出版。本書は、『アジアの荒地から』*From War-Wasted Asia: Letters, 1945-46*, Edited by Otis Cary, Kodansha International, 1975を底本とした。

9月、『玉砕』小田実、ティナ・ペプラーと共著。岩波書店から出版。『玉砕』の英訳版は、*The Breaking Jewel*として、NY: Columbia University Pressより2003年に出版。

*Frog in the Well: Portraits of Japan by Watanabe Kazan 1793-1841* NY: Columbia University Press.

東京都名誉都民・北区名誉区民となる。(霜降銀座商店街の住民とも交遊)「源氏物語千年紀」の呼びかけ人となる。親友、オーテス・ケーリ死去。

2007年(平成19)

85歳

3月1日、“Remembrances of Otis Cary”、「独特の友人、ケーリ君」(北垣宗治訳)両追悼文とも『追悼オーテス・ケーリ』(同志社アーモスト・クラブ)に収録。

3月、『渡辺華山』(*Frog in the Well: Portraits of Japan by Watanabe Kazan 1793-1841*) 角地幸夫訳で、新潮社より出版。

7月、自伝『私と20世紀のクロニクル』角地幸夫訳で、中央公論新社より出版。改題『ドナルド・キーン自伝』中公文庫2011。

「日本文学の国際性」“Japanese Literature”『ブリタニカ国際年鑑2007』平野勇夫訳

杏林大学より名誉博士号を授与される。

8月4日、小田実の葬儀にてお別れの言葉をのべる。東京・青山葬儀所  
司会：黒田杏子

- ・「夏終わる柩に睡る大男」小田実への悼句（杏子）
- ・「ドナルド・キーン加藤周一遠き蟬」（杏子）

10月3日、「国際交流基金金賞」をオーストラリア国立大学名誉教授・ロイヤル・タイラー氏が受賞。また、トルコの日本史研究者・A.S.エセンベル氏も同時受賞。二人のまな弟子の快挙を祝福するため、授賞式（東京：ホテル オークラ）に出席。

2008年（平成20）

86歳

*Chronicles of My Life : An American in the Heart of Japan*（『私と20世紀のクロニクル』）をNY:Columbia University Pressより出版。（翻訳出版元は中央公論新社、2007）

3月、「ドナルド・キーン先生と日本を眺め直す」黒田杏子『俳句の玉手箱』pp.110-13.

7月、『竹取物語絵巻』(*The Tale of the Bamboo Cutter*) 勉誠出版、pp.1-40.

8月、坂田藤十郎と対談。『演劇会』9月号、演劇出版社。

10月14日、小田実没後一周年記念講演会で講演。東京・ベルサール神田。

11月1日、『源氏物語』千年紀記念講演「源氏物語と私」京都 天皇・皇后陛下もご来臨。

『世界が読み解く日本』聞き手：伊井春樹（キーン他8名）學燈社

『<sup>よわい</sup>齡は財産』日本ペンクラブ編で光文社より出版。（キーンのタイトル「悪魔と私」）

*One Hundred Poets, One Poem Each* (Foreword by D. Keene) NY:Columbia Univ. Press.

11月3日、文化勲章を受章（外国人出身の学術研究者としては初の受賞）。

11月4日、「皇居で文化勲章親授式」『新潟日報』記事（同紙の10月28日の夕刊、29日の朝刊にも、キーンの文化勲章受章の記事が見られる）

2009年（平成21）

87歳

1月1日、新年メッセージ「やわらかな心」雑誌『婦人の友』1月号 p.32.

3月28日、「越後国・柏崎 弘知法印御伝記」の復活に寄せて（新潟日報 朝刊25面）。

6月、宝生流の「能」観劇のため、佐渡島を訪問。これが5回目の佐渡旅行。同月、2007年に復活上演を提案していた古浄瑠璃「越後国 柏崎 弘知法印御伝記」が柏崎で初上演される。

「井澤元一さんの思い出」古都が育んだ洋画家井澤元<sup>もといち</sup>一生誕百年記念展「螺旋階段」80号。

7月11-12日、新潟市で上演された、古浄瑠璃「越後国 柏崎 弘知法印御

伝記」を観劇。また同市の「會津八一記念館」をも訪問。

7月13日、『新潟日報』社の単独インタビューなどをも受ける。

7月16日、「佐渡への思いは格別 文化混ざり博物館のよう」『新潟日報』記事。

10月11日、講演「松山ゆかりの文人たち」(漱石—子規—山頭火) 松山・正岡子規記念館。

随筆「細江英公の写真」『鎌鼬』普及版 青幻舎。

『日本人の戦争 作家の日記を読む』角地幸男訳で、文藝春秋社より出版。文春文庫 2011。

[英文版] *So Lovely a Country Will Never Perish: Wartime Diaries of Japanese Writers*. New York: Columbia University Press, 2010.

### 2010年(平成22)

88歳

6月、米寿の祝いが東京・ホテル オークラで開催される。パーティーのハイライトは、越後角太夫(本名上原誠己)の「弘知法印御伝記」という古浄瑠璃の弾き語りであった。その声は強く、音楽的であった<sup>(5)</sup>。

9月、新潟県柏崎市にて講演「世界の中の日本文化」。

10月、古浄瑠璃「越後国 柏崎 弘知法印御伝記」の東京講演実行委員長を務める。東京・浜離宮朝日ホールで上演。

11月19日、「文化のかけ橋」つらぬく—ドナルド・キーン氏の『安吾賞』受賞に寄せて』『新潟日報』に掲載された記事(FK)。

12月1日、新潟市が主催する、第5回「安吾賞」を受賞。〈安吾賞は生きざま賞である〉が、丸谷才一は、「歴史的感覚」という、短いが忘れ難い〈祝辞〉を残した。

12月12日、「『安吾賞』授賞式 キーンさんらが喜び語る」(「市報にいがた」2285号)

### 2011年(平成23)

89歳

1月1日、石井頼子と対談「めぐりあう言葉と自然」雑誌『主婦の友』pp.16-27.

1月、「私の週刊食卓日記 12月6日~12日」。(「週刊新潮」1月13日号、pp.92-93)

2月、エッセイ「米寿」(『文藝春秋』2月号、pp.77-78)

3月11日、東日本大震災直後に、「いまこそ私は日本人になりたい」として、日本国籍取得を表明して、日本に永住を決意する。<sup>(6)</sup>

4月、「詩歌に詠まれた桜たち」村上護と特別対談(句誌『俳句』4月号、角川学芸出版)

4月24日“I want to be with Japan” an interview at his home in NY (*The Daily Yomiuri*)

4月26日、コロンビア大学最終講義は、「能」について。「余人を以て代え難い」人材であることから、退職後も同大学大学院で松尾芭蕉『奥の細道』や能楽『松風』などを講じる。89歳まで教壇に立ったのは、おそらくコロンビアの最年長記録のひとり。コロンビア大学を退職し、日本国籍取得を表明し、9月に日本へ帰国。

5月2日、コラム「河北抄」に、「宮城県沖地震の後、東北大で半年間講義し名誉博士号を贈られている」の記事がある。(『河北新報』)

6月29日、コロンビア大学図書館にて、NHK「クローズアップ現代」のキャスター・国谷裕子のインタビュー「ドナルド・キーン89歳 日本へ」を受ける。

8月、「なぜ、今『日本国籍』を取得するか」文藝春秋8月号、pp.156-63.

8月、日本永住のため、ニューヨークの自宅を引き払う。

9月、平泉、中尊寺を訪問。毛越寺にて、芥川賞作家・平野啓一郎と対談。

9月11日、岩手県平泉町の中尊寺で講話「日本人は復興できる」『河北新報』の記事。

10月11日、仙台市で記者会見「秩序と美のまちを」「もっと東北見たい」『河北新報』

10月16日、「ドナルド・キーン先生日本人となる」を、ブルボン カルチャースペシャルで放映 (BS-TBS)。平野啓一郎と対談「果てしなく美しい日本」(平泉・毛越寺) も含む。

10月26日、ドナルド・キーンさんに聞く「被災地 秩序ある再建必要」『河北新報』記事。

10月21日、「河北春秋」欄に、キーン氏と恩師・角田柳作の記事がある。(『河北新報』)

10月、瀬戸内寂聴と平泉、中尊寺で「日本人の強さ、日本の美」をテーマに対談。

11月26日、東洋大学より名誉博士号を授与される。記念講演は、「王朝の美意識」。

『戦場のエロイカ・シンフォニー 私が体験した日米戦』聞き手：小池政行。藤原書店。

12月、『ドナルド・キーン著作集』(*The Collected Works of Donald Keene* (全15巻)の第1巻「日本の文学」)を新潮社より刊行開始。この著作集は、「日本文学史」以外の代表作をあますところなく収録。<sup>(7)</sup>

『ドナルド・キーン自伝』中公文庫版。

2012年(平成24)

90歳

『日本を、信じる』瀬戸内寂聴と対談。中央公論新社より出版。

1月、「マリコのゲストコレクション」で作家・林真理子と対談。「週刊朝日」1/6・13)

2月、「日本の顔」冒頭のフォトグラビア8頁で紹介。(『文藝春秋』2月号)

2月、『ドナルド・キーン著作集』(第2巻「百代の過客」)が新潮社より出版。

3月8日、法務省より帰化申請を受理される。東京都北区役所に書類の提出を完了。日本国籍を取得。

4月、『ドナルド・キーン著作集』(第3巻「続百代の過客」)が新潮社より出版。

4月、NHK1000年インタビュー(京都)の後、インド・アフリカの旅へ出発。(5月帰国)

5月、「日本文学に詩歌の魂をみる」『三田文学』春季号No.109『ドナルド・キーン著作集』(第1巻)の書評(FK) pp.332-33.

5月、「ドナルド・キーン—私の感動した日本—」北区飛鳥山博物館特別展覧会(5.19~6.24)

6月、『ドナルド・キーン著作集』(第4巻「思い出の作家たち」)が新潮社より出版。

6月2日、北垣宗治・冷泉為人両氏との鼎談「日本、京都への思い」(同志社アーモスト館開館80周年記念講演会)。

句誌「件」が主催する第9回「みなづき賞」を受賞。贈賞式で、黒田杏子聞き手に講演。

6月18日、「卒寿」の祝いが東京・ケンジントンテラスで開催される。

6月20日、「67年前、私は沖縄の戦場にいた」朝日新聞記事(「銃使わぬ貫く」22面)

6月21日、英語による講演「俳人 正岡子規」駒沢大学深沢校舎。

7月、札幌大学で講演。その後、石川啄木の評伝執筆のため函館にて資料調査に当たる。

7月、日本女子大より名誉博士号を授与される。

8月、評伝『正岡子規』角地幸夫訳で、新潮社より出版。初出誌「新潮」(2011.1.~12.)

8月、『ドナルド・キーン著作集』(第5巻「日本人の戦争」)が新潮社より出版。

9月22日、早稲田大学より「芸術功労者表彰」を受賞する。

10月6日「ドナルド・キーンの東京下町日記」の連載が『東京新聞』で始まる。第一回のタイトルは、「世界に誇れる 文楽教えよう」。(以下は[註]にすべてを記録した)<sup>(8)</sup>

10月12日、「ドナルド・キーンさん 早稲田大学『芸術功労者表彰』受賞に寄せて 坪内逍遙の孫弟子 八一につながる縁のふかさ」『新潟日報』に掲載された記事 (FK)。

10月、「若沖・応挙の至宝」展鑑賞ため、新潟市・會津八一記念館を訪問。

10月、上原木呂展「百代の過客」鑑賞のため、新潟市・砂丘館を訪問。

10月22日、「日本人とともに生きたい」『朝日新聞記』記事 (文化欄 18面)

11月10日、講演「日本文化とW.B. イェーツ」東洋大学・井上円了ホール。

11月23日、NHKの「ニュースウオッチ9」に出演。「日本の針路」について語る<sup>(9)</sup>。

11月、「碧い目の太郎冠者 ドナルド・キーン薫風の日々」黒田杏子『手紙歳時記』pp.82-102.

・「小春日やドナルド・キーン先生と」(杏子)

12月、「古典の日」推進フォーラム・イン東京で、国立能楽堂で講演。

日本女子大学大学より、名誉博士号を授与される。二松學舎大学より、名誉博士号を授与される。コミュニケーション・リーダーシップ賞を受賞。

12月、「丸谷才一の思い出」雑誌『新潮』12月号、pp.230-33.

### 2013年 (平成25)

91歳

1月、『ドナルド・キーン著作集』(第6巻「能・文楽・歌舞伎」)が新潮社より出版。

1月、東京新聞主催の講演「日本文学と私」(江戸東京博物館ホール)

1月24日、ドナルド・キーン「コレクションコーナー」開設(東京・北区立中央図書館)。

(25日、「キーンさんの心感じて きょうから図書や浮世絵展示」『新潟日報』記事13面)。

2月11日、東京新聞フォーラム第1部として講演「日本文学と私—「源氏」体験が原点—」、同日、第2部として、鳥越文蔵との対談「これからの私の仕事—関心は啄木『ローマ字日記』へ—」。

「義政と銀閣寺」『同仁』銀閣 慈照寺(第2巻 第7号) pp. 04-08.

3月、「『方丈記』は語る」の巻頭言「“人と栖”の無常を災害を通して語る、稀有にして貴重な記録文学です」(『サライ』3月号 小学館) pp.104-05.

3月1日、玄順恵との対談「出会いと文学と」雑誌『明日の友』隔月刊

2-3月 pp. 34-41.

3月2日、「文楽・歌舞伎、継がれる強さ」（『朝日新聞』文化欄、p.17）

3月13～29日、ニューヨークへ里帰りして、コロンビア大学で講演。演題は、“Lifetime Student of the Humanities”。

4月29日、メディアシップ出航記念講演「私と新潟」新潟市：新潟日報ホール<sup>(10)</sup>。

5月4日、「新潟への思い軽妙に」『新潟日報』7面（4.29の「記念講演録」）。

5月6日、講演「私と日本文学」福井県生活学習館。（5月8日付の『福井新聞』には、幕末福井の歌人・橘曙覧<sup>あけび</sup>の一首「たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲ける見る時」を、1994年、天皇皇后両陛下の米国訪問の際、クリントン大統領が歓迎の挨拶で、キーン氏の英訳したこの歌を引用したことが述べられている。余滴だが、正岡子規は「源実朝以後、歌人の名に値するのは橘曙覧ただ一人」と称賛した。）

5月19日、『福井新聞』のコラム「越山若水」にも、キーン氏の講演のコメントがある。

5月、豪華客船「飛鳥II」にて、講演旅行（5月23～6月22日）。

5月、『ドナルド・キーン著作集』（第7巻「足利義政と銀閣寺」）が新潮社より出版。

5月、『私が日本人になった理由 日本語に魅せられて』PHP研究所より出版。

5月21～8月4日 早稲田大学芸術功労者顕彰記念「ドナルド・キーン展」早稲田大学演劇博物館 六世中村歌右衛門記念特別展示室。

6月6日、「私の源氏物語」魅力 引力 古典の力。[BS-TBS 19:00～21:00] 瀬戸内寂聴、芳賀徹（東大名誉教授）、隴谷 壽（同志社女子大学名誉教授）も出演。

6月30日、ドナルド・キーン講演「啄木を語る」岩手県民会館、平野啓一郎講演『「何となく」の真情』。ドナルド・キーン×平野啓一郎 対談「美しき日本の心」。

（翌日は、執筆の糧とするため、石川啄木記念館や啄木新婚の家、生家の曹洞宗・常光寺などを廻った）

6月、J.リーブラとの対談「三島由紀夫の死についての回想」『国際文化会報』Vol.24.

6月、「わが東北の思い出」『ベスト・エッセイ2013』pp.242-245。（「考える人」春号）

7月8日、「河北春秋」欄に、執筆中の石川啄木の評伝の記事がある。  
『河北新報』記事。

7月9日、北垣宗治の推薦により、同志社大学より、名誉学位を授与される。

7月14日、啄木学級講演「啄木を語る」東京：文京シビックホール。

7月17日、「ドナルド・キーン展 関連演劇講座、「文楽と近松－異国で出会う学問と芸術」鳥越文蔵講師と共に（早稲田大学大隈記念講堂 大講堂）主催 坪内博士記念演劇博物館。

7月17日、「霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き」芭蕉 D.キーンさんに聞く（『朝日新聞』）

7月、文楽の技芸員でつくるNPO法人「人形浄瑠璃文楽座」の名誉顧問に就任。

7月、「『玉砕』を翻訳して」、『われわれの小田実』藤原書店、pp.24-25.

7月、最新ロング・インタビュー「キーンの音楽自伝 歌声に魅せられしわが人生」前半（このインタビューは、7月と10月にキーン自宅で、2回行われた。聞き手：中矢一義）

8月6日、「福井の学生さんへ一筆」（徒然草で古典の喜びを伝え、「ひとり燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる」という一節を越前和紙に書いて、福井県の学生さんに贈った。）

『福井新聞』記事。

8月、「日本人の美意識と、食のあり方」辰巳芳子との対談、『ミセス』8月号、pp.176-81.

8月10日、式年遷宮が行われている伊勢神宮内宮で、新しい社殿の敷地に白石を敷き詰める「御白石持<sup>みしろいしもち</sup>」行事に、市松模様の法被に鉢巻姿で参加。

・涼しさや祭の後乃秋の朝（1973年10月3日 伊勢・麻吉旅館にて）

8月、『ドナルド・キーン著作集』（第8巻「青い眼の太郎冠者」）が新潮社より出版。

8月、「日本文士の肖像」序文。横尾忠則『日本の作家222』日本経済新聞出版社。

8月、*THE WINTER SUN SHINES IN : A LIFE OF MASAOKA SHIKI* New York: Columbia Univ. Press.（新潮社版『正岡子規』（2012.8）の英語版）

「ドナルド・キーン先生 “果てしなく美しい日本” を語る」『和楽』8・9号。pp.28-35.

次世代に残したい日本の美10として、文楽、源氏物語、旧仮名遣い、中尊寺・金色堂、歌舞伎座、陶磁器、日本人の心、京都の町並み、能・狂言、旧古河庭園、を挙げている。

9月1日、特別講義「古浄瑠璃の音楽性と作曲について」越後角太夫と共に、新潟市・「日報ホール」。新潟日報 未来大学 ゼミナール 主催・新潟日報社/共催・ブルボン吉田記念財団。

9月8日、「ドナルド・キーンと学ぶ越後角太夫が語る古浄瑠璃の世界」北区立中央図書館。

9月20日、「ドナルド・キーン・センター 柏崎」内覧会。(新潟県柏崎市諏訪町10-17 (株)ブルボン統合研修センター内)<sup>(11)</sup>。

9月21日、「ドナルド・キーン・センター 柏崎」開館。下村博文文部科学大臣より表彰状を受ける。

9月21日、「キーン氏の記念館完成 新潟・柏崎 書斎再現、2500点展示」『福井新聞』

9月28日、「『弘知法印御伝記』の発見（その経緯と意義）と人形実演」講師：鳥越文蔵・西橋八郎兵衛、柏崎市産業文化会館。

9月29日、センター会館記念講演「私と新潟・柏崎」、柏崎市文化会館アルフォーレ。

「世界に影響を与えた美意識」、『新潮45』新潮社、pp.21-23.

9月「私とフランス語の本」、「究」(ミネルヴァ通信)2013.9.(扉の〈書物逍遙〉の欄)

10月、最新ロング・インタビュー「キーンの音楽自伝 歌声に魅せられしわが人生」後半

10月2日、伊勢神宮の遷宮（内宮の遷御の儀式）を奉拝する。

10月12日、新潟市の砂丘館にて、「越後角太夫を聴く会」が開催された<sup>(12)</sup>。

10月22日、「ドナルド・キーンさん日本文学研究の原点 A.ウエーリ訳『源氏物語』新潟で展示 靈感与えた自由な翻訳」『新潟日報』に掲載された記事 (FK)。

10月26日、「越後から吹く風 キーン先生の想いをのせて」BSNテレビ（放送10：30a.m.-）

10月27日、文化講演会「作家たちとの出会い」東京都北区赤羽会館講堂。

10月30日、特別講演「私と外国語」東京外国語大学、プロメテウスホール。

11月、『ドナルド・キーン著作集』（第9巻「世界の中の日本文化」）が新潮社より出版。

11月9日、新潟県三条市の諸橋轍次記念館にて、特別ゲストとして講演。

11月25日、新潟市齋藤家別邸の「ドナルド・キーン展」にキーンはひょっこり現れて、篠田昭新潟市長と共に、数十人の報道関係の取材者や観客の前で、短いスピーチをした。

新潟市立図書館「ドナルド・キーン展」(齋藤邸展示のプレ展示：10月3日～11月5日)キーンの運命を決めた本、A.ウエーリ訳の*The Tale of Genji* by Lady Murasakiを展示。

旧齋藤家別邸で、本格的企画展「ドナルド・キーン展—日本との出会い/日本文学との出会い」展が開催された。前期「源氏物語とその周辺」11月19日～11月30日 後期「松尾芭蕉とその周辺」12月1日～12月15日(主催：新潟ドナルド・キーン研究会)。

11月28日、「キーン氏からお礼の色紙」(5月訪問 橘曙覧文学館へ)『福井新聞』記事。

12月6日、瀬戸内寂聴「キーンさんを語る 91歳という自覚のない二人」(対談場所は、同志社大学アームストロング館の庭園にある、無賓主庵)

12月14日、講演「日本の短詩型文学の魅力」福岡ユネスコ・アジア文化講演会。

12月29日、日本人キーン・ドナルド「90歳を生きる」3:00p.m.～2時間(BS-TBS)放映。

「ニッポン不易流行」キーン×瀬戸内寂聴(対談)7:00p.m.～2時間(BS-TBS)放映。

## 2014年(平成26)

92歳

1月15日、「高揚する東京の街 東北もう忘れたか」(ドナルド・キーンさんに聞く)『朝日新聞』文化欄(聞き手・中村真理子)

2月26日、堤清二(辻井喬)の「お別れの会」の実行委員長となる。帝国ホテル(富士の間)。午前11時から12時、午後1時から2時の二回。(「没後20年三島由紀夫特集」(『新潮』H.2.12.1)で、辻井喬と対談「伝説から実像へ」がある。pp.100-15)

2月、『ドナルド・キーン—世界に誇る日本文学者の軌跡—』が河出書房新社より出版。

2月、「An Abundant Well That Never Runs Dry」(桐原書店版 文部科学省検定教科書 *PRO-VISION English Communication II*, Lesson 1, pp.5-13)

3月1日、「日本文学の巨人、ドナルド・キーン大研究」雑誌『和楽』4月号、pp.28-46。

3月10日～7月21日「ドナルド・キーンの直筆原稿が語る『日本文学を読む』」(前期)ドナルド・キーン・センター柏崎 特別企画展<sup>(13)</sup>。

4月6日、「キーン家墓石の開眼式」(東京都北区の真言宗豊山派・無量寺)家紋等のデザインは上原木呂氏。

4月7日、『曾根崎心中』(東京・歌舞伎座)、坂田藤十郎(82歳)の最後の

お初を観劇。

4月9日、「三島由紀夫、キーンさんへの最後の手紙 レプリカ 柏崎で展示」『新潟日報』に掲載された記事（FK）。

4月12日、NSTテレビ特別番組「伝えたい キーン先生の日本文学愛」。  
11:05-11:35a.m.

4月12日、「多分最後のアメリカでしょう」と言って、ニューヨークに旅立つ。古い友人と旧交を温めて、5月14日に帰国<sup>(14)</sup>。

5月7日発売の雑誌『新潮』（創刊110周年記念特大号）に、新連載『石川啄木』が始まる。

5月22日、アメリカンセンターJapanのイベント“Poetry Boxing”の来賓のひとりとして招かれる。

6月、没後7年になる小田実の電子書籍・オンデマンド版『小田実全集』全82巻（講談社）が完成。全集の監修者であるキーンと小田実夫人で画家の玄順恵が「戦争」という小田実とキーンに共通するテーマで語り会った。

6月9日、「キーン氏を『名誉市民』に 市では初めて称号授与へ」『柏崎日報』記事。

6月10日、「キーンさん 柏崎名誉市民第1号に」『新潟日報』記事。

6月11日、「新潟との縁 戦中から 91歳ドナルド・キーンさん語る」『新潟日報』記事。

6月17日、「ドナルト・キーンの新潟下町日記」の連載始まる。「敵、味方を越えた友情元従軍記者との縁」『新潟日報』文化欄(20)記事。

6月25日、『ドナルド・キーン著作集』（第10巻「自叙伝 決定版」）を新潮社より出版。ここでは、「我が『処女小説』」の執筆を明かしている。  
pp. 211-12.

6月27日、「キーンさん 57年前に恋愛小説」（日本文学）研究専念前に執筆「自信ない」と封印。『ドナルド・キーン著作集』（第15巻）に収録予定。『新潟日報』記事。同日の『福井新聞』の記事には、「キーンさんが恋愛小説」（57年前、封印 著作集に収録へ）とあり、さらに7月1日付『朝日新聞』朝刊には、「57年前の恋愛小説 日の目」という見出しの記事がある。

7月1日、新潟県柏崎市名誉市民の称号を贈られる。同市の名誉市民第1号。（同年大みそかの「日報抄」の〈いろはかるた〉に：[か] 柏崎名誉市民にキーンさん）

7月1日、『日本の俳句はなぜ世界文学なのか』弦書房（T. クリステワと共著：講演録）

7月6日、鳥越文蔵との対談「曾根崎心中と近松門左衛門」山口県立劇場

「ルネッサ ながと」。長門市と京都市の講演の合間に、広島県福山市の江戸情緒溢れる港町・鞆の浦を訪ねて、一泊。沖合には明治天皇が好んで訪れた風光明媚な仙酔島が浮かぶ。桃山時代に豊臣秀吉が観劇したとされる能舞台は、鞆の浦の沼名前神社に移築され、重要文化財になっている。また、福山市在住の翻訳家のナンシー・ロスとも旧交を温める。

7月9日、講演「京都の伝統と現代」京都東急ホテル（葵の間）13:00～14:30。この講演会では、開催中の作品展「井澤元一展」に触れて、井澤画伯との交友と、『日本文学散歩』の挿絵を依頼した経緯なども語った。（7月10日付『京都新聞』参照）

7月22日、「9条解釈改憲に抵抗感 日本兵の“叫び”」『新潟日報』記事（同記事は、7月6日付『東京新聞』にも掲載された）

7月22日、「音楽は敵同士を友にした」『朝日新聞』（インタビュー記事）。

8月19日、「古い日本の美残したい」広島・鞆の浦『新潟日報』記事。

8月22日、『芸の真髓シリーズ第八回 山城屋 坂田藤十郎』『曾根崎心中』に魅せられる 対談・坂田藤十郎×ドナルド・キーン」が掲載される。

9月5日、集英社『kotoba』（季刊誌 2014号）「日本らしさ」を超えた文学『夏の闇』を掲載。pp.26-31.

9月6日、小澤征爾コンサート「ラプソディー イン ブルー」を鑑賞。サイトウ・キネン・フェスティバル松本（キーンと小澤征爾は、2008年文化勲章を授与された、いわば同期生で、控え室で15分間ほど歓談。この音楽会には、ノーベル文学賞の候補と目される村上春樹氏の姿もあった。小澤征爾×村上春樹『小澤征爾さんと、音楽について話をする』参照）

9月9日、中村義裕著『九代目 松本幸四郎』三月書房の〈帯文〉。

9月10日、軽井沢の山荘から、東京・北区西ヶ原の自宅に帰る。

9月23日、「年齢考えず研究に専念」健康長寿の秘訣『新潟日報』記事。

9月25日、「忘れ得ぬ『日本の心』」art news 節子・クロソフスカ・ド・ローラとのdialogue『芸術新潮』pp.94-97.

9月30日、『ドナルド・キーン わたしの日本語修行』白水社（聞き手：河路由佳）

（10月26日付の『新潟日報』紙「本を語る」のコラムには、「言語習得の道や体験 率直に」という河路氏の記事が載った。）

10月5日、“My life is the happiest that I ever had”: Scholar Message Special: Thoughts from Donald Keene (*The Japan News*)

10月5日、「ドナルド・キーンが語るメトロポリタン・オペラ」(BS191 WOWOWプライム)

10月7日、『ミセス』（11月号）に、「ドナルド・キーンさん、NYメトロポリタン歌劇場へ」を掲載。pp.266-69.

10月13日、「ドナルド・キーン・センター柏崎」開館一周年記念講演会「日本文学の魅力」：キーン先生思いを語る、「果てしなく美しい日本」（聞き手：中津義人）。

10月13日、ドナルド・キーンの思い「地域の財産伝え続けて」『新潟日報』記事17面

10月14日、新潟文化の記憶館を訪れ、自身とゆかりの深い特別展示「終戦を促した祖国愛 米軍将校と日本兵捕虜」などを見学した。（10月15日の『新潟日報』の「終戦への思いにキーンさん感慨」を参照。特別展示期間は、10月7日～12月14日まで。）

10月15日、第67回新聞大会記念講演「文字離れと未来～新聞の役割～」ANAクラウンプラザホテル新潟3階「飛翔」。（翌日の新潟日報記事、「活字離れ憂慮『言葉が一番大切』」）

10月16日、新聞大会の講演「伝えるべきことを考えよ」新潟日報記事。

10月20日、傘寿を迎えられた皇后陛下に皇居に招かれる。日系3世の教え子・ミルドレッド・タハラ（日本名・田原満治子）を付き添いとして帯同。

10月22日、「日本人 ドナルド・キーンさん」NHK新潟放送局「朝の随想」（担当：西沢翔）

10月24日、「キーンさんの語りに感動」『新潟日報』投稿欄記事。

10月25日、デイヴィッド・ピリング著『日本一喪失と再起の物語（下）』早川書房の〈帯文〉。

10月29日、「キーン先生の思いに同感」『新潟日報』投稿欄記事。

10月23日、松本幸四郎（三代）の「勸進帳」を鑑賞。東京・歌舞伎座。

November 1, "Sensei and Sensibility After 73 years, Donald Keene '42 '49 GSAS leaves Colombia for Japan" *The Interpreter Archives*, University of Colorado at Boulder Libraries.

11月1日、国立文楽劇場 文楽公演（11月）番付に、随筆「文楽と私」が掲載される。

11月9日、講演「日本文学と私～外国研究の喜び～」南山大学名古屋キャンパス

11月10日、『中央公論』（12月号）に、「92歳、好きなものを作って食べて」が掲載される。

11月17日、ドナルド・キーン・センター柏崎の入館者が7000人を達成した。

11月18日、60年前、谷崎潤一郎との出会いの場である、京都「石村亭」を訪問。谷崎の口述筆記をされた、伊吹和子さんも同席された。

11月21日、「平和への思いひとときわ 日系3世の教え子」『新潟日報』記事。

11月25日、講演「生きてゆく言葉」松山市民会館ホール（「スミセイ ライフフォーラム」）に招かれ、講演のあとで、「対談と歌唱」ドナルド・キーン×新井満もあった）

・「赤くなる 松山の城を 子規も見た」（松山講演での吟）

・「松山や 城にのぼさん 道後の湯」（新井満の句）

11月28日、「万葉世界賞」の選考委員会に出席。東京お茶の水・山の上ホテル。

11月28日、『うるわしき戦後日本』戦後、なぜここまで世界を魅了する文化の花が咲いたのか？（堤清二（辻井喬）と共著）PHP新書。

12月1日、『文藝春秋』（12月号）に、弔辞「辻井喬へ、堤清二へ～詩人として、経営者として～」が掲載される。

12月10日、講演「私の金沢～若き人たちへ～」金沢工業大学キャンパス（「大学コンソーシアム 石川」）に招かれる。聞き手：堤伸輔）

12月10日、「思い出す2人の日本人 真珠湾攻撃の日」『新潟日報』記事。

12月25日、「ドナルド・キーン著作集」（第11巻「日本人の西洋発見」）新潮社。

12月26日、「外国からの眼で日本を見直す 失望生むリーダーの言動」中村桂子『東京新聞』（夕刊）

『中央公論』十二月号 「92歳、好きなものを作って食べて」

小学校検定教科書『国語六 創造』に、「かなえられた願い—日本人になること」光村図書。

[註] ~~~~~

- (1) 『日本文学を読む』は、新潮社の雑誌『波』に1971年11月号～77年6月号まで全66回にわたって連載された。ドナルド・キーン・センター柏崎の特別企画展は、「ドナルド・キーンの直筆原稿が語る『日本文学を読む』」として、[前期]2014年3月10日～7月21日、[後期]7月25日～12月25日まで展示された。
- (2) 『百代の過客』は、平安初期から幕末までの「日記にみる日本人の素顔」を考察したもので、キーン氏の代表作。わけても阿仏尼あぶんにの『十六夜日記』では、我が子に家督を継がせようとする訴訟のための鎌倉下向の旅立ちの夜空には、十六夜の月が輝いていた、という意味合いが込められている。阿仏尼の権利意識が冷泉家を創り、藤原俊成卿、定家卿の残したお宝を守った。日本文学史上に燦然と輝く業績とされるが、阿仏尼が鎌倉幕府に権利の正当性を粘り強く訴え、勝訴となった時には、阿仏尼本人はすでにこの世の人ではなかった。今から700年以上の昔の話であるが、そのときすでに日本は「讓状ゆずりじょうが置き文（遺書状）」として採用される法治国家であった状況が見える。
- (3) 敬和学園大学は1991年4月の開学のさい、北垣宗治初代学長がキーン氏に「記念講演」を依頼し、大学と講演者の調整の上で、10月24日に新発田市民文化会館で開催された。講演記録が文字化されていないのは、甚だ残念であるが、キーン氏は『徒然草』第7段「あだし野の露消ゆる時なく、…世は定めなきこそいみじけれ。…命長ければ辱多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」を引用して、日本人の無常観むじょうくわんを熱く語った。余談であるが、キーン氏の日本文学の翻訳の中で、吉田兼好『徒然草』と太宰治『斜陽』は、彼の最高の出来栄であり、翻訳中に、まるで兼好法師や太宰が自分に乗り移ってくるようであった、と語った。
- (4) キーン氏が四半世紀をかけたライフワーク『日本文学史』（全18巻）を刊行した後、評伝『明治天皇』を刊行。英文版は922頁、翻訳はハードカバー（上下巻）1148頁、文庫版（全4冊）1996頁に及ぶ大作である。キーン氏は、日本の都道府県の全てで講演をしているし、海外でも講演を依頼されている。が、敬和学園大学創立10周年の記念講演のように長いタイトルで講演したことがない、と断言して聴衆の笑いを誘った。  
講演内容は、『明治天皇を語る』（新潮新書）にも述べられているが、明治天皇という偉大な指導者の知られざる魅力をユーモアのセンス豊かに語った。（この記念講演は、『私の大事な場所』（中央公論社、pp.108-25）に収録されている）
- (5) 「弘知法印御伝記」は、後日、東京・浜離宮朝日ホールで越後猿八座の人形遣いの方々と一緒に全曲を語る機会にも恵まれ、聴衆に深い感銘を与えた。この浄瑠璃は、ドイツ人医師ケンペルにより日本から持ち出され、325年もの間、大英博物館において、一度も上演されることなく眠っていた。英国に留学した、早稲田大学の鳥越文蔵教授が、1962年、この説経浄瑠璃の唯一の台本を発見した。キーン氏は、復活上演を提案。越後角太夫はこの古浄瑠璃に新たな命を吹き込み、復活させようと全力を尽くした。（鳥越文蔵/チャールス・ダン共編『古浄瑠璃集』[大英博物館本]古典文庫（1966）に収録されている。江戸孫四郎正本「弘知法印御伝記」pp.19-79）
- (6) キーン氏の高弟・バーバラ・ルーシュは、「先生の日本人になりたいとの願いは、一番親しい友人たちのあいだでは、東日本大震災のずっと以前から知られていました。日本は先生の心の故郷でした」と語っている。愛する日本を抱きしめて、

日本に帰化したい、というキーン氏は、大震災のずっと以前から、それに向かつて歩を踏み出していた。あのすさまじい出来事と直面し、偶然に2つのタイミングが時を同じくして重なり、その結果自分の愛する国民との連帯を訴える意思表示として、氏が「今こそ私は日本人になりたい」として、衝動的に日本国籍を申請した、と受け取られたのは遺憾である。瞬間的に生じた感情による意思表示などではなかったことを理解してこそ、キーン氏の名誉がいつそう増すというものである。

- (7) 『ドナルド・キーン著作集』(1～15巻)の刊行は、日本文化や文学をこよなく愛してきたキーン氏が、「私の70年に及ぶ研究の成果であり、それを支えたのは、日本文学という私の喜びの源泉です。その喜びを、ぜひ読者の皆さんと分かち合いたいと願っています」として、新潮社から刊行中。現在、第11巻まで既刊で、以下順次刊行予定。
- (8) 『東京新聞』の第一面を飾る、「ドナルド・キーンの東京下町日記」は、2012年10月からの人気のある連載コラムである。毎回、各月の第一日曜に掲載され、東京新聞社ビルの前のショーウィンドで足を止めて、キーン氏のカラー写真と軽妙な文章に魅せられる人々も多い、という。NYのコロンビア大学図書館の展示ケースには、連載中のコラムが、「Tokyo Downtown Diary」として、展示されている。

#### 「ドナルド・キーンの東京下町日記」(東京新聞)

##### 2012年

1. 10月6日「世界に誇れる 文業教えよう」 2. 11—3「一目ぼれして 38年同じ部屋」  
3. 12—2「三島への戯れ 癒えぬ痛みに」

##### 2013年

4. 1月—1日「富士が私を導いた」 5. 2—3「玉砕 再び聞きたい」  
6. 3—3「被害者への思い 忘れていないか」 7. 4—7「晩年まで教壇 薫陶受けた師」  
8. 5—12「70年消えぬ悔恨 兵士の日記は今」 9. 6—2「芭蕉に諭され 日本研究の旅」  
10. 7—7「古浄瑠璃の地 柏崎なぜ原発」 11. 8—3「夏の記憶 原爆 消えぬ「なぜ」」  
12. 9—8「遷宮のように 必ず立ち直る」 13. 10—6「ノーベル賞と 三島、川端の死」  
14. 11—3「『源氏』の美に救われ」 15. 12—15「沖縄戦の日系米兵」

##### 2014年

16. 1—5「憲法9条 行く未憂う」 17. 2—2「荷風のまなざし」  
18. 3—2「『福島』伝え続ける」 19. 4—6「新潟との深い縁」  
20. 5—6「最高のシンフォニー」 21. 6—8「元従軍記者との縁」  
21. 7—6「消えゆく『理想の国』」 22. 8—3「『保全』の心大事に」  
23. 9—7「年齢にとらわれず」 24. 10—5「新聞で『今』知る」  
25. 11—2「不戦願う日系3世」 26. 12—7「真珠湾攻撃の日」

- (9) 司会の大越健介(1961—)氏は、長岡市出身。新潟高校～東大時代は、野球部に所属。東京六大学リーグでは、右アングラスローの投手として通算8勝。頭脳派というより剛腕、直球、真っ向勝負の投手だった。東大文学部の卒業論文は坂口安吾論。2005年よりNHKアメリカワシントン支局長。著書に『ニュースキャスター』(文春新書)がある。
- (10) 演題は「私と新潟」。キーン氏と新潟県との縁は深く、1956年、直江津経由で佐渡島を訪問したことにはじまる。佐渡では、国の無形文化財に指定された「文弥人形劇」を見物。また、古典芸能の能に魅せられたキーン氏は、能などの鑑賞や講演などのために、5～6回も佐渡を訪問している。「罪なくも 流されたしや 佐渡

の月」は、キーン氏が佐渡で詠んだ名句。

- (11) キーン氏は、風光明媚な場所に住居を構えるのがお好きのように思える。ニューヨーク (=NY) のハドソン河畔のマンションも、東京都北区のマンションもそうである。さんざめく大都会の喧騒から、不夜城に代わる<sup>かはたれ</sup>彼誰時に、しばしの静謐な空気が漂うように感じられた。米国の劇作家・T. ウィリアムズは、ある作品の中で、「久遠の薄暮」(perpetual twilight) と呼んだが、この度の「ドナルド・キーン・センター 柏崎」を訪問して、氏の書齋に一步足踏み入れた時、この言葉が筆者の脳裏をよぎった。

学術研究者にとって書齋は、ある意味で修羅場のようなものだ。キーン氏は、一日の史料検索、参考文献の査読、読書と研究と執筆を終えて、11階のご自宅から、眼下に広がる大河・ハドソン川を照らす夕日の返照を観て、その美しさに、時を忘れ、ひと時の憩を感じられたのではなからうか。白を基調とした氏の書齋に、一条の返照が射し込んで、茜色に染める。そのような雰囲気であったと、筆者は信じている。書齋には、キーン氏の父親が1927年に購入した、中国製の絨毯が敷き詰められていた。世界大恐慌のためにキーン家の家運が傾く、2年前のことである。また、書齋入り口の白く古いドアには、メイドが御主人の食事の進み具合などを知る、小窓が付いているのも興味深い。

(筆者は、3度米国を訪問した。生涯で2度しかNYを訪問したことがないが、NYは世界一魅力的で蠱惑的な街だ。それぞれの訪問が一週間余の滞在で、観るべきこと、聞くべきこと、訪ねるべき場所の選定に、これほど苦慮した都市は他にない。NYの大学、NYの文学記念館、NYの図書館、NYの博物館、NYの近代美術館、NYのブロードウェイでの芝居見物、NYシティ・オペラ、NYのホテル、NYの乗り物、NYの公園の散策、NYの食文化、NYのパーティ、NYの人々との交わり、どれもこれも忘れ難い思い出がある。)

- (12) 番外の余興として、袴姿のキーンの素狂言が飛び出した。この狂言は、1956年、喜多能楽堂で武智鉄二氏と演じた『千鳥』と同じもの。今回は上原木呂氏が「主」をやる。それから新潟市立図書館を訪れ、「ドナルド・キーン展」(プレ展示)を観る。篠田昭新潟市長も参加した。A.ウエーリ訳の『源氏物語』(*The Tale of Genji* by Lady Murasaki, Houghton Mifflin, 1935: 函入り2巻本)を食い入るように眺めるキーン氏の姿が印象的であった。
- (13) 三島の最後の手紙はコロンビア大学C.V.スター東亜図書館に所蔵されているが柏崎にあるドナルド・キーン・センター 柏崎では、そのレプリカの展示や三島とキーン氏との交遊を紹介する展示がある。また、3/10から「ドナルド・キーン」の直筆原稿が語る『日本文学を読む』特別企画展が開かれている。展示の見所は、キーン氏が新潮社の雑誌『波』に連載した「日本文学を読む」の直筆原稿である。キーン氏は、「原稿用紙に書かれたものですから、骨董品になります」と謙遜するのだが、日本文学研究への熱い思いが吐露された文芸評論の傑作を、キーンさんの直筆の流麗な日本語で鑑賞できたことは、来館者一人ひとりにとって、まさに至福の時間となった。
- (14) 日本人となったキーン氏の2度目の訪米(2014.4.21~5.14)。NYでは、石川啄木について講演するためコロンビア大学を表敬訪問。講演会は大盛況で大好評。NYでは、知己と旧交を温め、メトロポリタン・オペラ(メト)を3度も楽しむ。NYからグラウンドキャニオンに行く。天候にも恵まれ、雄大な自然を満喫する。日本語学校時代を懐かしみ、カリフォルニア大学バークレー校にも足を運ぶ、そし

てサンフランシスコのオペラハウスでバレエを楽しむ。また、モンレーの水族館を訪問して、大いに楽しむ。

・大学生用英文テキスト

- 『生きている日本』 (*Living Japan*) 朝日出版社、1971.
- 『ある日本学者の告白』 (*Confessions of a Japanologist*) 朝日出版社、1982.
- 『日本人の独自性』 (*The Distinctiveness of the Japanese*) 朝日出版社、1983.
- 『英語へのパスポート』 (*A Passport of Good English*) 朝日出版社、1983.
- 『旅の楽しみ』 (*The Pleasures of Travel*) 朝日出版社、1984.
- 『古今英雄集』 (*Heroes, Old and New*) 朝日出版社、1985.
- 『世界の英雄たち』 (*Heroes through History*) 朝日出版社、1986.
- 『ドナルド・キーン：わたしの日本』 (*Living in Two Countries*) 朝日出版社、1985.
- 『わが母国、アメリカと日本』 (*Two Countries, Two Homes*) 朝日出版社、1988.

ドナルド・キーン著『わたしの日本語修行』書評

1943年、戦時下のアタク島で戦友と撮った写真がある。キーン氏は、右手に一度も発砲したことのないカービン銃を携え、左手で『新和英大辞典』(研究社)を抱きしめている。のちにコロンビア大学の教え子の語るところでは、この辞書は、噂によると、キーン氏の就寝時の愛読書で、見出し語の最初と2番目の意味はほとんど覚えてしまい、やがて普段あまり使われない3番目と4番目の定義にも精通しているだろう、という。その後の業績の大きさを俯瞰すれば、キーン氏ほどの人物はもう二度と現れないであろう、と思われる。

本書は、五章から成っていて、一章～三章では、キーン氏が19歳で、生涯を決定づけた米海軍日本語学校に入った経緯や、長沼直<sup>なほ</sup>直<sup>あ</sup>見<sup>み</sup>『標準日本語讀本』を教科書として使用して、日本語修行の思い出が語られる。例えば、猛スピードでの書き取り練習は、教師が「台湾」というと、学生は「臺灣」と書かなければならない。当時は略字ではなかったので、時間がかかる。灣の半分を書いたところで、次に「ユウウツ」を書けという指示が飛ぶ。俊英ぞろい学生たちは、切磋琢磨して、わずか11か月で日本語をマスターした。キーン氏は、卒業式に総代に選ばれ「告別の辞」を日本語で述べた。四章は、戦地の赴いてからの仕事や戦後に日本文学の専門家としてスタートするところを中心にまとめ、五章は、日本語・日本文学の教師として、数多くの専門家を育成したことに焦点を当ててある。

本書で感動した箇所は、J. バイチマンさんの「師 D. キーンを語る」の部分。『語曲20選』(20 Plays of the NŌ Theatre) の中の彼女の担当の「遊行柳」は、名訳の誉れ高いが、キーン氏のたくさんの添削が反映されている、と彼女は語っている。参加した学生たちは、のちに有名になるが、その筆頭がR・タイラー氏で、『平家物語』の見事な翻訳がある。

本書の構成は、キーン氏が日本語・日本文学の学習と教育について語った内容をまとめたもの。聞き手の河路由佳さんは教育学者。海軍日本語学校で使用された、「ナガヌマ・リーダー」(全7巻)を持参するなど、周到な準備をしてインタビューに臨んでいる。本書を味読していくと、行間から若き日のキーン氏という、血の通う生身<sup>なま</sup>の人間の全体像が立ち上がってくるようだ。世界に誇る日本文学研究者の軌跡を描いた良書である。

## 〈主な参考文献〉

- Keene, Donald. *Meeting With Japan*. Tokyo: Gakuseisha, 1979.
- \_\_\_\_\_. *On Familiar Terms*. New York: Kodansha International, 1994.
- \_\_\_\_\_. *Chronicles of My Life: An American in the Heart of Japan*. New York: Columbia University Press, 2008.
- キーン, ドナルド. 『日本との出会い』 篠田一士訳 中央公論社, 1972.  
この本の初出は、東京新聞・夕刊 (1971.10.26~12.28) に、全40回連載された。
- \_\_\_\_\_. 『私と20世紀のクロニクル』 角地幸夫訳 中央公論新社, 2007.  
この本の初出は、*The Daily Yomiuri, Saturday Edition*(2006.1.14~12.23)に連載、全49回。
- \_\_\_\_\_. 『声の残り』 金関寿夫訳、朝日選書、1997.  
この本の初出は、朝日新聞・夕刊 (1992.4.1~7.14) に全57回連載された。
- \_\_\_\_\_. 『このひとすじにつながりて』 金関寿夫訳 朝日選書、1993.  
この本の初出は、*Asahi Evening News, Sunday Edition* (1990.1.7~1992.2.9) の全110回の連載を翻訳したものである。英文版 (*On Familiar Terms*) は「日本との出会い」の原文の一部と「声の残り」の原文の一部を挿入して、全7章で構成されている。
- \_\_\_\_\_. 『ドナルド・キーン著作集』(1~10巻) 解題 新潮社、2011~2014.
- \_\_\_\_\_. 『わたしの日本語修行』 (聞き手: 河路由佳) 白水社、2014.
- 河出書房新社編 『ドナルド・キーン 世界に誇る日本文学者の軌跡』、2014.
- 東京都北区立中央図書館編 「ドナルド・キーン・コレクション 図書目録」、2013.
- 中津義人編 「ドナルド・キーン年譜」(柏崎「ドナルド・キーン・センター」室長)、2013.
- 上原木呂編 「ドナルド・キーン初版本蔵書目録」(竹野町DK文庫)、2013.
- 冷泉貴実子 『冷泉家800年の「守る力」』 集英社新書、2013.

※ 「DK略年譜」中の「雑誌」「新聞」の書評や「新聞記事」で (FK) とあるのは筆者。  
(例) 2012年5月「日本文学に詩歌の魂をみる」『三田文学』春季号 No.109 (FK) など。